

近代京都の漆工芸

美術工芸資料館では、2月27日～4月13日まで「館蔵漆芸品展 一伝統意匠の継承と近代の蒔絵」展を開催している。この展示は、美術工芸資料館が所蔵している漆芸作品を展覧するもので、日本の伝統工芸である漆芸が、江戸時代から近代への流れの中で、意匠面においてどのような変化を遂げたのか作品を通してご覧いただく。

漆の木の植生は、東アジアを中心に広がっており、各国で様々な漆文化が形成されてきた。日本の漆器に見られる「蒔絵」は、日本独自に発達した加飾技法である。器面に漆を付けた筆で文様を描き、その上に金や銀などの金属粉を蒔きつけて装飾を施す技法で、様々な工程が存在し、江戸時代には技術的な隆盛を極めた。中でも京漆器においては、公家や武家の好みとの結びつきが強く、複雑な工程を用いたり、金をふんだんに使用した高級漆器が制作されてきた背景がある。

しかし明治時代になると、東京遷都による影響や、内国勲業博覧会をはじめとする博覧会や各共進会が国内で開催されるようになったことで、京都の伝統工芸界を取り巻く環境は一変する。京漆器は主要な需要層を失ったことで著しく衰退し、政府の意向によって産業工芸の振興に重さが置かれたことで漆芸の今後のありかたが問われる状況となった。明治という新しい時代は、京都の漆芸家にとって非常に苦しい局面となったのである。

明治維新以降、「産業の近代化」や「新意匠の開発」は、工芸品全般の大きな課題として盛んに提唱されるようになる。地場産業の近代化が目指され、新たな技術の導入や生産面での改革が行われる中、手仕事としての習熟度が要求される漆芸は、近代化の恩恵を受けにくかった。新意匠の考案は漆芸にとっては特に重要な改良点となった。

漆器の新たな販路の獲得を目指し、明治中期以降多くの漆工研究団体が京都で設立される。これらの団体では図案家が手がけた図案をもとに現代の生活環境にあう漆器が制作され、漆器の展覧・販売も行われた。

当時図案家として活躍していた浅井忠(1856-1907)と神坂雪佳(1866-1942)は、京都の工芸界を牽引する二大勢力と呼ばれ、若手漆芸家であった杉林古香、迎田秋悦、戸島光乎らに大いに影響を与えた。本学の前身である京都高等工芸学校の図案科で教鞭をとっていた浅井は、明治39年(1906)に若手漆芸家の団体である「京漆園」を結成している。本来洋画家であった浅井

は、日本画にも強い関心を持ち、日本の伝統的な意匠を継承する形で様々な作風の図案を手がけ若手の工芸家に提供した。

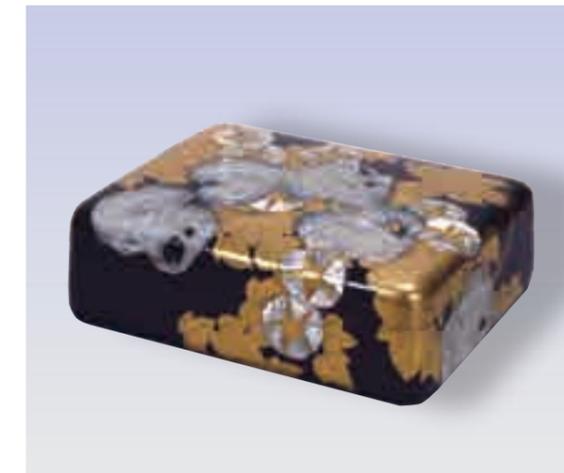
《七福神蒔絵菓子器》(図1)は、浅井忠図案による迎田秋悦(1881-1933)作の唯一の現存作品である。鉛の使用や蒔絵の技法が見受けられるが技巧的な側面は少なく、彩漆の使用や多彩な表現の駆使によって斬新な印象を与える仕上がりとなっている。秋悦は、「京漆園」設立のきっかけとなった人物で、図案の改良に非常に関心を持ち、日本画を三宅呉暁に師事した経験から自らも積極的に図案を手がけ精力的に活躍した。晩年には帝国美術院展の審査員をつとめるなど、近代漆芸界を代表する蒔絵師として知られている。秋悦の作風は幅広く必ずしも一貫しているわけではないが、多くの作品が琳派などの古典を軸にした意匠で手掛けられ繊細で技巧的な表現を得意とした。《七福神蒔絵菓子器》は秋悦の作品の中でも数少ない前衛的な作品と見ることができる。

続いての《朝顔蒔絵手箱》(図2)は、秋悦と同じく京漆園で活躍した杉林古香(1881-1913)によって制作されたもので、鉛を全体に用い、器面に螺鈿、高蒔絵の技法がみられ、立体感のあるつくりになっている。古香は図案制作を目的とした「小美術会」を結成した人物で、小美術界の活動を通して浅井と知り合い、熱心に交流を図り、浅井図案による作品を数多く手がけた。当時、本阿弥光悦を祖として起こった琳派の意匠表現は、日本の伝統的な意匠感覚として再評価され、工芸の中にたびたび取り入れられた。浅井も琳派の意匠に多用された「遠近感を除いた草花の様式的な表現」や「鉛や貝を大胆に配する表現」を好んで取り入れ、現代の意匠感覚に合う新意匠を模索した。両作品は京漆園の活動の中で制作されたもので、大正2年(1913)に京都高等工芸学校が作家本人から購入している。

浅井の没年となる明治40年には、浅井図案の作品を販売する「九雲堂」が四条に開店している。九雲堂は、浅井が懇意にしていた祇園のお茶屋「大友」の磯田多佳(1879-1945)が女将をつとめ、陶器や漆器などが販売されていた。高浜虚子の小説「續風流懺法」には、浅井と多佳がモデルとなった「浅田先生」と「お藤」が登場し、当時の九雲堂の雰囲気を感じさせる場面が繰り広げられる。お藤が女将をつとめる「九雲堂」には、茶器や皿、盃などの陶器が多く並べられ、陶器ほどの量ではないが漆器も置かれていたと描写されており、その中に「先生の図案になる光悦風の棕



(図1) 図案：浅井忠 制作：迎田秋悦《七福神蒔絵菓子器》明治42年(1909)AN.1620



(図2) 図案：浅井忠 制作：杉林古香《朝顔蒔絵手箱》明治42年(1909)AN.1617

榈の葉の蒔絵の重箱」というのが登場する。この作品の描写は、九雲堂に並べられた作品を示唆するものと思われ、当館所蔵の《棕櫚蒔絵重箱》(図3)を想起させる。明治40年出版の「古香作品集」に掲載されるこの重箱は、杉林古香が図案から手がけたものであるが、浅井の影響を大いに受けた古香が制作したという点から、小説に登場する重箱の様相に通じる部分があると思われる。なお、九雲堂では、浅井が主導する「遊陶園」と「京漆園」で制作された作品の販売もされていた。

九雲堂が開店してからわずか3カ月後に浅井は急逝してしまうが、浅井図案はその雅号から「黙語風」図案として親しまれ多くの工芸家から好評を得ていた。その後、浅井の工芸図案における影響は次第に薄れていくものの、近代京都の画家や工芸家を巻き込む形で行われた一連の図案改革は非常に興味深いもので、現代の漆芸へとつながる大きな運動として捉えることができる。その足跡を思い浮かべながら展覧会をご覧いただければ幸いである。

(美術工芸資料館 技術補佐員 下出茉莉)



(図3) 杉林古香《棕櫚蒔絵重箱》制作年不詳AN.1658

【参考文献】

浅野古香編『古香作品集』芸艸堂、明治40年3月8日発行
高浜虚子『續風流懺法』「ホトトギス」明治41年5月1日発行
谷崎潤一郎『磯田多佳女のこと』『谷崎潤一郎集』河出書房、昭和28年3月